

保育科学生の保育者観の形成

岩井 勇 児

子どもが好きで早くから保育者を志望した学生が、授業、実習などを経て、予想していたよりも保育者は大変な仕事であると感じている様子を、自由記述の調査から明らかにした。そこから、保育者養成のあり方について、検討した。

問題と目的

本学に赴任した1998年4月、2年生の合宿研修「幼児教育セミナー」に参加した。そこで、「教育実習（幼稚園実習）の反省」というテーマで、グループの討論を聞く機会を得た。

その学年は、1年次後期に毎週幼稚園実習をするという実習形態をとっていた。2年生のはじめには、まだその実習経験が生々しく残っている時期であった。

学生の報告のほとんどが、自分が「うまくできなかった」「上手にやれなかった」「思うようにできなかった」といったもの、あるいは「思ったより大変だった」といったものであった。

それらの話を聞いていて、うまくできないから実習をするのだから、1年生の教育実習で、うまくできないのは当たり前なのに、どうして、自分がうまくできない、ということに、こんなにこだわるのか、不思議な気がした。それと共に、子どもの話があまりでてこなくて、自分のことだけが話題の中心になっていた。実習内容よりも自分の評価のほうが気になるようだった。

かつて、教員養成大学において、教育実習の前後で、学生の教職観がどのように変化するかを調べたことがあった(岩井勇児, 1969)。その実習は、基礎実習として2年生に2週間実施していたものであった。それによると、実習後、学生の教職観は、現職教員の教職観に近づく傾向が見られた。このことの解釈は、教員養成観によって異なるが、私は、2年生の段階で教員の傾向に近づくこ

とは、学生の教育上望ましくない、と考えた。

数学科の学生の感想の中に、「小学生に算数を教えるのに、なぜ大学で高等数学を勉強しなければならないのか」というのがあった。つまり、教員養成は即戦力になる実務教育だけすればよい、という要求である。

教員養成を支える二つの流れ、いわゆる師範教育と大学教育(大まかにいえば、「実務と使命感の教育」と「研究能力と人格の教育」)は、私の在職中の教員養成大学においてよく対立し、なかなか統合発展に至らぬ状態であった。保育者養成においても、内容は異なるが、同じような二つの流れ、すなわち実務教育と大学教育のそれぞれが、その機能を果たすことが望まれる。

本学において、授業あるいは調査等とおして得た学生の要求をみると、即戦力になる実務教育を求める傾向が強い。それは、学生達には、まだ、幼児教育あるいは保育の全体像が把握できず、自分が経験した範囲だけから、保育者像を描いているからだと考えられる。

そこで、本研究においては、本学の学生が、どのような過程を経て本学に入学し、本学の教育において保育者観をどのように形成しているのか、その実態を調べることにした。

そして、「上手にやれる」というレベルから、もう少し幅広く、これからの時代の変化に対応して柔軟に保育を考えることができる保育者を養成するための資料としたい。

方 法

(1) 調査票の作成

学生の保育者観について、いくつかの視点から検討するために、次にあげるような質問を作成した。調査票は末尾に添付した。

- ① 進路状況：本学学生は、幼稚園・保育所への就職希望者が大部分であるが、調査時点における進路状況をきいた。
 - ② 「保育者になりたい」時期ときっかけ、理由：時期は選択肢を用意、後者は自由記述。
 - ③ 入学時と比べた現在の保育者のイメージ：変わったか否か。その内容の自由記述。
 - ④ 保育者養成という視点から、本学の教育への感想・要望：自由記述。
 - ⑤ 保育者としての長所・自信：自由記述。
 - ⑥ 保育者としての短所・不安：自由記述。
 - ⑦ 短所・不安に対する対応：自由記述。
- ⑤～⑦をとおして、保育者として何が大事だと考えているのか、保育者観が現れると考えた。
- ⑧ 後輩へのアドバイス：ここにも保育者観が現れると考えた。

(2) 調査の実施

- ① 調査対象：2年生で教育心理学受講者、156名
- ② 調査時期：1999年12月
- ③ 実施：授業時間中に筆者が実施。無記名。なお、保育者以外の進路を選ぶ人は、保育者になると仮定して回答するように求めた。

(3) 自由記述の分類

本調査の大部分は、自由記述の回答を求めた。そこで、これらの記述を分類するに当たって、複数の意味が表現されている文章は、一文一つの記述内容となるように分解した。こうして、整理した文章を分析の単位とした。調査全体として、分析の対象とした文章は、総数1740個となった。

本来は、この記述を直接読んでいただくと、学生の考えていることが分かり易いのであるが、膨大になるので適当なカテゴリーを設定して、集計し、記述の具体例を例示した。

集計に当たっては、こうした文章の集合全体の中で、特定の分類カテゴリーがどのくらいの割合であるかを見ることにした。したがって、比率を

求める場合、分母はその項目における文章数になり、調査人数ではない。調査対象の個人を無視して、全体を一つの意見集団と仮定した集計である。

結 果

(1) 進路状況

表1の上段に示したように、80%が幼稚園・保育所を志望し、この時点での予定者もその後全員就職している。なお、進学者(専攻科介護専攻、保育専攻)の中にも保育者志望がいるから、全体としてみれば、他への進路はごく僅かである。

表1 就職状況、志望時期など (N = 156)

		f	%
就職状況 12月6日現在	幼稚園保育園内定	106	67.9
	幼稚園保育園予定	19	12.2
	一般企業内定・予定	3	1.9
	進学内定・予定	20	12.8
	その他	6	3.8
	無回答	2	1.3
志望時期	就学前から	19	12.2
	小学生の頃から	39	25.0
	中学生の頃から	44	28.2
	高校入学の頃	17	10.9
	受験の頃	28	17.9
	その他	9	5.8
保育者の イメージ	変わった	145	92.9
	変わらない	11	7.1

(2) 保育者になりたい時期と理由

保育者になりたいと思った時期は、表1の中段に示したように、案外早く、中学生頃までに65%、高校入学頃までに76%を占めている。

保育者になりたい理由について、分類したものが表2である。

表2 保育者になりたい理由

	f	%
子どもが好きなど	77	33.5
保育園の先生に憧れてなど	72	31.3
職業として魅力があるから	52	22.6
進路指導など勧められて	21	9.1
その他	8	3.5
記述数	230	100.0

「子どもが好きなど」には、「子どもが好き」の

ほか、弟やいとこの面倒をみたなど、子どもとのふれあい経験によるものも含めた。

「保育園の先生に憧れてなど」には、幼稚園、保育園の園児の頃の先生への憧れのほか、母、姉、叔母、など身内に先生がいて、その影響をうけたものもかなりあった。

「職業として魅力があるから」には、中学生、高校生のときに保育園の体験をして、楽しそうだった、女性としてやりがいのある仕事であると思ったなどがあった。また、資格が取れて一生続けられそうな仕事、ピアノを生かせる職業、毎日変化がある仕事、人格形成に携わる意義ある職業、などがあった。

「進路指導で勧められて」には、受験のころ、友人、親、先生など周囲に保育者に向いていると勧められた、OLになりたくなかった、音楽大学が無理だった、などがあった。

これらをみると、かなり早い時期から、積極的に保育者を志望していた者が多いことがわかる。

(3) 保育者のイメージの変化

「入学の頃と現在では保育者のイメージが変わったか」の結果は、表1の下段に示したように、「変わった」が93%、「変わらない」は7%であった。

変わらない場合の内容は、ほとんどが、保育者に肯定的積極的イメージを最初から持っていて、現在も同じだと答えていた。

変わった場合の記述を分類したのが、表3である。これをみると、その90%が、「思っていたよりも大変な仕事である」と感じている。以下、各分類項目の記述例を若干あげておこう。

表3 保育者のイメージの変化

		f	%
思ったより 大変な仕事 (88.9%)	子ども好きだけでは	16	8.5
	子どもと遊ぶだけでは	11	5.8
	優しいだけでは	12	6.3
	責任が大きい	21	11.1
	奥が深く大変	43	22.8
	準備や雑用が多い ハードで楽でない	26 39	13.8 20.6
見当がついた (9.6%)	子どもが見えてきた	9	4.8
	やりがい・見当がついた	9	4.8
幻滅	立派でない人もいる	3	1.6
	記述数	189	100.0

子ども好きだけではだめ

- ・ただ単に子どもが好きというだけではやっていけないものであることに気づいた。
- ・子どもが好きというだけで保育者としてやっていけるというイメージがあったけど、それは違うと学び、難しいというイメージが強くなった。

子どもと遊ぶだけではなかった

- ・歌を歌って、子どもと遊んでいけばよいと思っていたが、そうでないことがわかったから。
- ・以前は保育者は、ただ子どもと一緒に遊ぶというイメージしかなかったけれども、今は、遊ぶ時の子どもの発達、環境など考えて一緒に遊ぶことが大切だということに気付いた。

優しいだけではだめ

- ・「優しい」というイメージから「しっかりした」先生へと変わった。
- ・ほがらかで優しい人をイメージしてましたが、気も強くないとできない仕事だと思えるようになりました。
- ・優しいだけでなく、善悪の価値基準をしっかりと持ち、叱ることもできなければならない。

責任が大きい

- ・保育者は、子どもが好きで、優しいだけでなく、子どもを守る仕事という責任が重いというイメージになった。
- ・子どもが好きでそこそこピアノが弾けたら保育者になれるのだろうと考えていたが、現在、保育者は、重大な責任を負わされている職業だと思った。
- ・人の子どもをあずかっているという大きな責任があるということ
- ・保育とは幼児期の人間形成の基礎なのだということで、責任のある仕事だと考えるようになったから。

奥が深く大変

- ・とても奥が深く、今、改めて保育者の重要性がわかりました。
- ・子どもの満足できるような保育をするために、ものすごい援助をしていく大変な仕事だと思う。
- ・細かいことにまで気をとめて言葉掛けをしたり、環境構成をしたりと、とても深いものだとおどろきました。
- ・子どもの成長・発達などを考えた上で保育しなければならないなど、学べば学ぶほど、保育者というのは大変な職業なんだと思った。
- ・入学前は保育者は養護的なことをすることが多いというイメージが、保育者は教育的なことも遊びの中でしていかなければいけないことが多いというイメージになった。

準備や雑用が多い

- ・ただ子どもと遊ぶイメージしかなかったが、実さいは、用意をしたり、配慮、環境構成など、あらゆると

保育科学生の保育者観の形成

ころで大変、準備というのか、裏の作業が多いことが分かりました。

- ・ただ子どもと遊んでいるだけかと思っていたけど、週案、日案などを立て、1人ひとりの子どもの発達をしっかりと見ていて、想像していた以上に大変な仕事だと思った。
- ・実習を終えて、立案などの保育以外の仕事の大変さを実感した。

ハードで楽でない

- ・かなりつらく、体力的にもきびしい仕事だということ。
- ・とても大変でハードな仕事だと思うようになった。
- ・もっと楽しく簡単な仕事だと思っていたが、子どもについて考えなければならないことがとても多く、また、裏の部分でやらなければならない仕事が多く、楽しいと感じていた保育者の仕事がとてもつらくて厳しいものになった。
- ・楽しそうというイメージが苦しそうというイメージに変わりました。
- ・思っていたより重労働で、大変責任の重い職業だと感じるようになった。
- ・保育者にのんびりしたイメージを抱いていたが、実際は大変なことばかりで、のんびりしてられない。

子どもが見えてきた

- ・「子どもに好かれる先生になりたい」という私の願いが「子どもを幸せにできる保育者になる」という決意に変わった。
- ・最初は集団をまとめることを考えていたが、「一人ひとりを大切にする」ということがどんなことなのか、少しずつ見えてきた。
- ・子どもへの思いが強くなった。

やりがい・見当がついた

- ・やりがいがある仕事だと思う。
- ・他の職業では感じることでできない感動を得ることができ、常に成長、学ぶことができる職業だと感じるようになった。
- ・漠然と描いていた「自分のしたい保育」を細かくイメージ出来るようになった気がする。

立派でない人もいる

- ・保育者として現場に立たれている先生方でも、保育時間にもかかわらず全く関係のないことを話している時があり保育に集中していない姿を見て、保育者といってもいろんな方がいると思いました。

(4) 保育者としての長所・自信

「あなたの保育者としての資質を振り返ってみて、長所あるいは自信のあるところ」についての回答を分類したのが、表4である。

表4 保育者として長所・自信

	f	%
性格的なこと	147	42.1
健康・体力・運動	20	5.7
子どもが好き	19	5.4
子どもとうまくやれる	82	23.5
指導技能の力がある	76	21.8
その他	5	1.4
記述数	349	100.0

このうち、「性格的なこと」がもっとも多かったのであるが、そのうちの半数は、「明るく、元気で、笑顔が得意」が占める。次項にあげる短所等と比べると、指導力等に関する事項があげられていない。以下、各項目の例をあげておこう。

性格的なこと

- ・いつでも明るく、元気な性格だと思う。
- ・大きな声で元気よく挨拶ができる。
- ・明るくて、いつもどんな時でも笑顔で接することができる所。
- ・笑顔は誰にもまけないくらい自信があります。
- ・1度の失敗に負けず、次へつなげていく。
- ・何でも精一杯やる。
- ・何に対しても積極的に取り組む。
- ・何事も一生懸命、努力する。
- ・向上心がある。
- ・いろんな方向から物事を考えようとする。
- ・おっとりしていて焦らない。
- ・やさしい。
- ・協調性がある。
- ・責任感がある。
- ・時と場合にあった反応や行動が瞬時にとれる。
- ・自分が嫌なことは相手にもしない。
- ・自分のことが好き。
- ・手抜きをしない。
- ・周りの出来事にあまり動じない。
- ・人前に出ても緊張しない。
- ・整理整頓が好き。
- ・大きな声で物事を言い、伝える。

健康・体力・運動

- ・健康なこと
- ・健康管理がしっかりしている。
- ・運動が得意。
- ・子どもに負けない程のエネルギーを今は持っています。
- ・笑顔と元気、体力。
- ・体を動かすことが好き。

子どもが好き

- ・子どもが大好きなところ。
- ・子どもを心からかわいいと思い、どの子も1人ひとりちがっていて、大切なひとりと素直にかんじられること。
- ・子どもに好かれる。
- ・乳児などの世話をするのが好き。

子どもとうまくやれる

- ・子どもの話をゆっくりと聞いてあげることができる。
- ・子どもと楽しく遊べる。
- ・子どもと関わることで、自分自身に笑顔や力がでてくる。
- ・誰にでも平等に接する事ができる。
- ・子ども一人ひとりを見て、きちんと対応できる。
- ・行動の遅い子、できない子へのフォローや援助など、子どものやりやすいようにできると思う。
- ・子どもと同じような気持ちになって接することができる。
- ・泣く子や、人前が苦手な子の気持ちがよくわかる。
- ・子どもの名前をすぐ覚えられる。
- ・1人ひとりの子どもに合った言葉掛けを心掛けている。
- ・はじめをもって子どもと接することができる所。
- ・すぐにとけ込める。
- ・子どもの表情を見て気持ちを判断できる様になってきた。
- ・面倒見が良い。
- ・冷静に子どもたちを指導できる。
- ・保育を自分でも楽しく思えるところ

指導技能の力がある

- ・もともと人前で話すことが得意であった事から絵本の読み聞かせであったり、紙しばいの読み聞かせには自信があります。
- ・自分の手で物を作ったり、お話を作ったりすることが好きなこと。
- ・手あそびや絵本の読みきかせが得意。
- ・声がかいので、子どもの前で元気良く歌をうたったり、呼びかけができる。
- ・子どもたちと楽しくピアノを弾きながら歌うことができる。
- ・ピアノが得意なのでそれを生かしたいと思います。
- ・歌うことが好き。
- ・カード作りや壁面などを作るのも好きです。
- ・絵を書いたり、色をぬったり、作ることが好き。
- ・製作が好きで子ども達と一緒に楽しくやれる。
- ・折り紙を折ったり、工作をすることが好き。
- ・発想がたくさん浮かぶ。

その他

- ・自分ではどれが長所かわからない。
- ・ありません。

(5) 保育者としての短所・不安

「あなたの保育者としての資質を振り返ってみて、短所あるいは自信がなくて不安に思うこと」についての回答を分類したのが、表5である。

表5 保育者としての短所・不安

		f	%
個人的資質 (31.0%)	内向的・消極的	44	12.5
	神経質・情緒不安定	35	9.9
	体力・健康	12	3.4
	機転・判断力	9	2.6
	言語能力	9	2.6
指導力 (36.1%)	全体の把握指導	42	11.9
	子どもの理解	9	2.6
	子どもへの接し方	54	15.3
	子どもを叱る	22	6.3
指導技能 (29.5%)	ピアノ・歌	46	13.1
	造形・制作	26	7.4
	手遊び	8	2.3
	話・言葉がけ	18	5.1
	日案・指導案	6	1.7
人間関係	同僚・保護者	12	3.4
記述数		352	100.0

「長所・自信」に比べると、「個人的資質」の割合が低くなっている。また、子どもとの関係が、先生としての「指導力」の枠組みで考えられている。先輩の先生や親との「人間関係」もあげられている。

個人的資質のうち性格的なことは、内向的・消極的傾向と神経質・情緒不安定の傾向があげられている。指導力のなかでは、個別に子どもの相手をしていると全体の指導ができなくなることと、子どもへの接し方で様々な面があげられていた。子どもを叱ることができない、という記述が案外多かったので、別の項目とした。

以下、項目別に具体例を挙げておこう。

内向的・消極的

- ・初めての人に対して、つい消極的になる。
- ・人の前に出るとあがってしまう。
- ・やることがマイペースで遅い。
- ・環境になれるまで引っ込み思案である。

神経質・情緒不安傾向

- ・すぐに落ち込む。
- ・緊張してすぐ顔が赤くなり、かまえてしまう。

保育科学生の保育者観の形成

- ・嫌いなことが表情に出てしまうこと。
- ・考えすぎてしまうところが悩みの原因。

体力・健康など

- ・食べ物の好き嫌いが激しい。
- ・体力があまりないところ。
- ・体力づくりと体調管理が不安。

機転・判断力

- ・その場その場で、臨機応変に動くことが苦手。
- ・困ったときの対応に機転が効かない。
- ・優柔不断で、すぐにぱっと決められない。

言語能力など

- ・ワープロができない。
- ・言葉遣いが悪い。
- ・字が下手。

全体の把握・指導

- ・その場の雰囲気、流れを読みとって、保育ができない。
- ・集中力がないので、一日中、多くの子どもに目が行き届いているか心配。
- ・これからクラスを持つことで、一人でやっていけるのか。
- ・どんな子になって欲しいのか、まだ見つからない。
- ・一人一人と深く愛情を持って接しますが、どうしても全体を見ていくことが難しいと感じます。
- ・子どもがすぐバラバラな行動をしてしまう。
- ・子どもたちを、うまく纏められない。
- ・どうしてもいつも同じ子どもと遊んでしまう。

子どもの理解

- ・きちんと子どもの個性を見ることができるのか不安。
- ・子どもの気持ちを読みとって、接することができない。

子どもへの接し方・働きかけ

- ・子どもとの接し方がよく分からない。
- ・どうやったら子どもがのびていくのか分からない。
- ・子どもがどんな状況で、どんな援助をしたらよいか、実際現場に立つと不安になる。
- ・子どもが騒がしくなったとき、静かにできない。
- ・子どもたちの安全を守れるか。
- ・子どもたちを自分に惹きつける自信がない。
- ・子どもの遊びを発展させる力がない。
- ・私に保育ができるのか、本当に向いているのか不安。
- ・自分がまだ子どもに教えるという立場になれない。
- ・自分の何気ない言葉で、子どもを傷つけないか。
- ・あまり幼児が好きになれない。0～2歳ぐらいまでは大丈夫ですが、3～5歳の子どもは苦手です。
- ・ほとんどが不安ばかりで、これが不安とはあげられない。

子どもを叱る

- ・ケンカが起きたときの対応ができない。
- ・ちゃんと叱れない。

- ・言うべきことをきちんと言えない。
- ・子どもに強くなれず、自分自身が不安な顔などをしてしまう。

ピアノ・歌

- ・ピアノが苦手。柳城に通うようになってから、更に拍車がかかって、苦手意識が強まった。
- ・ピアノが苦手なので、多くの曲を子どもたちに合わせて弾けるか不安です。
- ・歌が下手なので、子どもに歌を教えることができるのか。

造形・制作

- ・応用力、発展力、発想力がない。
- ・絵が余り好きじゃないので、子どもに「○○の絵を描いて」といわれたときが不安。
- ・工作が大の苦手な壁面や制作の時、何も頭にアイデアが浮かんでこないし、不器用でつukれない。
- ・不器用で、壁画づくりや、折り紙の指導などが自信がない。

手遊び等

- ・あまり手遊びを知らない。
- ・運動もそれほど得意ではない。
- ・劇や踊りの知識・技術がない。

話・言葉かけ

- ・声のトーンが高くて、キンキンしているため、子どもが騒がしくなってしまう。
- ・クラス全体の前に出て、話をしたりすることが苦手。
- ・絵本の読み聞かせ、話、などするのが苦手。
- ・子どもたちにその場にあった言葉かけができるか。
- ・導入から主活動へのもっていきかた。

指導案・日誌等

- ・指導案を含めて、日誌の書き方。
- ・日案、部分案などの指導案が全然書けない。

同僚・保護者との人間関係

- ・園の先生や親とうまくやっていけるか。
- ・保護者の方とうまくコミュニケーションをとっていけるのか、今、とっても不安です。

(6) 短所・不安への対応

「短所あるいは自信がなくて不安に思うことに関して、自分なりに何か対応を考えていますか」に対する回答について、まず、表5の項目に対応して分類したのが、表6である。これをみると、「個人的資質」に関しては少なく、「指導力」「指導技能」に関するものが、比較的多い。

次に、項目別でなく全体をとおして、「対応の仕方」について分類したのが、表7である。これをみると、「努力する・頑張る」が76%をしめる。こ

れは、短所・不安に対して、おうむ返式的に努力する、頑張るなどと回答しているものである。短所を認めた上で「それなりにやっていく」のが、案外少なかった。それぞれの項目について、具体例をあげておこう。

表6 項目別にみた短所・不安への対応

	f	%
個人的資質	39	17.6
指導力	99	44.6
指導技能	72	32.4
人間関係	12	5.4
記述数	222	100.0

表7 短所への対応の仕方

	f	%
努力する・頑張る	168	75.7
人に相談・人を見習う	25	11.3
それなりにやっていく	10	4.5
特にない	13	5.9
その他	6	2.7
総計	222	100.0

努力する・頑張る

- ・(めんどくさがり)面倒くさいと思わず、何でも楽しんでやる。
- ・(自分の意見がいえぬ)自分が思っていることを何でも言葉で表してみたいと思う。
- ・(消極的)積極的に、自信がもてるように努力しようと考えています。
- ・体力づくりをしようと思がけている。
- ・(みんなの前で話すの苦手)何度も繰り返して慣れていくしかない。
- ・(一人でやることに不安)下準備をよくする。
- ・(全体を把握できない)意識して、常に全体を把握するように、視野を広げるように努力する。
- ・(子どもの心がわからない)常に決めつけないで知ろう、分かろうと思って接する。
- ・(判断が遅い)子どもの前に立つことになったら、なるべく意識して、はやく自分で判断できるようにしたい。
- ・(細かな対応) 実習の時先生方に聞いたことで解決しようとする。
- ・(子どもに積極的になれない)なるべく保護者の姿をみたり、勉強して子どもたちと接する。
- ・(子どもに優しすぎる)行動にけじめをつけ、いけないことはいけない、良いことはよいと、と子どもに伝えられるようにする。

- ・(子どもへの気配り) 自分の気持ちの持ちようが変わると思うので、とにかく頑張る。
 - ・何人の子どもがいても一人一人を大切に愛していけるようにしていきたいと思います。
 - ・自分自身精一杯頑張るしかない。
 - ・(弾き歌い苦手) 練習あるのみ。
 - ・ピアノなど、数多く練習して、レパートリーを増やす。
 - ・ピアノは努力する。
 - ・大きな声で歌うことができるよう練習している。
 - ・(アイデアがない) 授業や本などを見てアイデアをためています。
 - ・(絵画制作不器用) 絵は、雑誌やイラスト集を手本に描けるようにする。
 - ・(制作が苦手) いろいろな本が出ているので、参考にして、自分なりにアイデアが出てくるようにしようと思っています。
 - ・(発想力がない) 雑誌や本で、ゲーム、遊び、工作などの知識を増やす。
 - ・(不器用、折り紙) 得意なものを練習しておく。
 - ・手遊びのレパートリーを増やす。
 - ・積極的に遊びゲームなど、魅力的なものを身につけておく。
 - ・もっと子どもに聞こえるようにお腹から声を出すようにする。
 - ・字はなるべくきれいに書くように心がけます。
 - ・早口なのはなるべくゆっくりと相手が分かり易いように話せばいいと思う。
 - ・(人間関係が下手) 誰とでもうまくやれるように、人間形成に勤める。
 - ・(人見知り) 人前に出る機会を作るために、アルバイトで接客をしている。
- 人に相談・人を見習う**
- ・(失敗をおそれてしまう) 事前に友達などに相談する。
 - ・母親に相談する。
 - ・(指導) 自分の卒園した園に連絡を取り、担任だった先生などに相談する。
 - ・(指導力) 先輩に素直に聞く。
 - ・(子どもの理解) 子どもとの生活の中で、失敗を繰り返して学ぶ。
 - ・わからないことはどんどん先輩の先生に聞いていこうと思う。
 - ・先生方の接し方を見て学んでいこうと思う。
 - ・先輩の先生方からアドバイスをいただくなどして、一人で悩まないようにする。
 - ・手遊びなどは友達に聞くようにしている。
- それなりにやっていく**
- ・短所があるから自分をなくすのではなくて、短所も個性としてとらえて、自分らしく生きていきたい。
 - ・「言葉がけがうまくできない」と実習の時質問したと

ころ「子どもと接するうちに、自然にできるようになる」といわれたので、子どもの様子を見ながら一緒に生活していきたい。

- ・環境に慣れれば大したことはない。
- ・保育園に入って、実践している中で学んでいきたい。
- ・(ピアノが下手)アカペラで歌う。

特にない

- ・あまり深く考えていない。
- ・ただ悩んでいるだけで、対応は考えていない。
- ・今のところなにもない。

その他

- ・(自分の時間が無くなる)時間に関しては、土日に沢山遊ぼうと思う。

(7) 本学の教育への感想・要望

「保育者養成という視点から、本学の教育について、感想あるいは要望」についての回答を分類したのが表8である。これをみると、「要望・批判」が53%、「感謝・肯定」が38%であった。

「要望・批判」の中で、「教師」に関するものは、特定の講師に対するものが多かった。「授業」に関しては、理論的なものよりも、実践的、実技的、すぐ役立つ授業をもっと多くして欲しい、という要望が多かった。「実習」については、1年のはじめから、もっと多く、などであった。「就職」に関しては、公立の試験準備の講座を望むもの、などであった。

「感謝・肯定」の中で、「教師」は、保育に熱心でよい先生が多い、といったもの、「授業」は、実践的で役に立つ授業が多かった、「実習」は、実習が多くてためになった、「よかった」は柳城で学んでいろいろな面でよかった、などである。

表8 大学への感想・要望

	f	%		f	%
要望・批判	112	52.8	教 師	14	6.6
			授 業	76	35.8
			実 習	9	4.2
			就 職	5	2.4
			そ の 他	8	3.8
中 間	19	9.0		9	4.2
感謝・肯定	81	38.2	教 師	9	4.2
			授 業	27	12.7
			実 習	10	4.7
			よ かった	34	16.0
記 述 数	212	100.0	記 述 数	212	100.0

(8) 後輩へのアドバイス

「保育者になるための学生、という視点から、後輩へのアドバイスがあったら」についての回答を分類したのが表9である。

表9 後輩へのアドバイス

	f	%
保育者目指してがんばれ	11	5.9
保育者の特徴	20	10.8
保育者として注意すること	60	32.3
在学中にしておくの良いこと	35	18.8
実技等蓄えておくとうい	27	14.5
実習のアドバイス	17	9.1
授業はまじめに聴く	16	8.6
記述数	186	100.0

それぞれの項目についてみると、「保育者を目指してがんばれ」では、保育者になりたい気持ちを大切に頑張れ、「保育者の特徴」では、大変な仕事、素敵な仕事、などである。「保育者として注意すること」は、実習等でいわれたことを伝えている。「在学中にしておくの良いこと」では、2年間は短いから何でも積極的に経験しておくとういなど、「実技等蓄えておくとうい」では、ピアノ、手遊び、教材、などのレパートリーを広げて、準備しておくとういなど、「実習のアドバイス」では、実習は辛い役立つから頑張れなど、「授業はまじめに聴く」では、授業は大変でも自分の力なるからまじめに聴いた方がよい、といったところが主なところである。

考 察

(1) 学生の保育者イメージ

膨大な自由記述を全部読むと、多種多様な記述があり、本来単純に整理できないものだが、ここでは、記述の多かったものを取り上げて、学生の描く保育者のイメージを大まかにまとめておこう。

子どもが好きで、子どもと楽しんだ経験があり、幼稚園、保育園の園児の頃の先生に憧れたり、母親など身内に保育者がいたりして、かなり早くから保育者になりたいと思って、本学に入学した。

授業や実習経験によって、保育者はそれほど甘いものではなく、いろいろ大変な仕事だと気づいた。明るく笑顔で健康で、子どもへの接し方、ピ

アノ、絵などが上手、など自信をもつ学生もいるが、内向的で情緒不安定で、指導力が不足しており、ピアノや絵などが下手で不安な学生もいる。不安を克服するには、頑張るしかない、と思っている。

こうした学生の自由記述をどう解釈し、評価するかは、読む側の資料の扱い方や保育者養成観による。以下、私なりの視点で、考察しておこう。

(2) 自分の言葉で考えない固さ

期末試験の採点をしていると、テキストやノートのある部分を丸暗記して書いているから、間違っているとはいえないが、全く分かっていない感じがする答案に出会い、配点に苦慮することがある。

今回の調査は、無記名とはいえ、授業担当の教師が実施した調査であるせいか、膨大な学生の自由記述を読んでいると、そうした答案を読んでいるのと同じ感じの回答がかなりあった。

たとえば、保育者のイメージの変化、に関してみると、「ハードで楽でない」「準備や雑用が多い」などは、実習の実感として述べているようだが、「責任が大きい」「奥が深く大変」などにまとめた内容に関する記述では、教育、発達、援助、環境構成、自立、責任、人間形成、などの用語を使って書いていても、ほとんどが自分の言葉になっていない感じであった。こうした質問をされたから、授業や実習で、いろいろと聞かされたことを書いた、ということらしい。

「子どもと遊んでいけばよい」、といった素朴な保育者観に対して、授業や実習において「そんなことでは働まらない」と教育されてきたことが、こうした記述から読みとれる。こうした教育は、保育者養成の一段階としてそれなりの意義はある。

しかし、卒業前の時期においても、それを自分の言葉で表現するまでになっておらず、しかも、「保育者は大変な仕事」といったレベルから発展していないのである。

(3) 子どもの心よりも自分の評価に関心

「保育者としての長所・自信／短所・不安」を見ると、常識的な記述が多かった。ふだんから自分で考えたり反省したりしているわけではなく、こ

うした質問をされたから、実習等で先生達からいろいろといわれてきたことを、そのまま書いた、という感じである。

教育心理学の授業において、性格検査を実施して、世間では外向性は明るくてよく、内向性は暗くてよくない、などと考えられているが、人間は矛盾した存在であるから、そんなに単純なものではなく、それぞれ一長一短があると理解すべきであること、保育者の資質として、外向性がよくて内向性が悪いなどと思わないように、かなり強調したつもりである。

しかし、学生の記述を見ると、たとえば、外向性は長所で、内向性は短所である、というように、単純に分けて考えているのが多かった。同じ性格特徴を長所としても短所としても取り上げている回答は、ごく僅かしかなかった。

子どもの心の状態によっては、「明るく、元気で、笑顔」をもって「はっきりした声で」声かけすることが、マイナスに働くことだってある。内向的で神経質な保育者が、よい働きをすることだってあるのだ。しかし、そうした視点はほとんどみられなかった。

また、子どものけんか、泣く、騒ぐ、といったことへの対応ができない、という記述がかなりあった。これに関しての学生の話などから察すると、こうした子どもが騒ぐ事態にぶつかると、その時の子どもの心の動きなど考えている余裕はなく、ともかく騒ぎを鎮めようと焦るようである。

長所・短所に限らず、学生の自由記述全体を、学生が何に関心を抱いているか、という視点から読んでいくと、子どものことよりも、「私が保育者として、どのようにうまく振る舞えるか」が、最大の関心事のようである。しかも、その「うまく」は、先生や友人から見ての「うまく」であって、子どもから見たものではない。

実習等で、多少は子どもに接触しているのに、「子どもの心の動きが面白かった、楽しかった」などの記述は、僅かであった。だから、保育者は大変な仕事になってしまうのである。

(4) 自己評価力が乏しく対応策がない

「短所・不安」の記述が、自分で考えたものではないせいか、「自分なりに何か対応を考えている

か」についての回答は、それほど内容のあるものではなかった。

たとえば、「消極的で何事にも自信がない」に対して「積極的に自信がもてるように努力する」、「ピアノが下手」に対して「練習します」、といったように、実現可能な方策を書かないで、ただ「努力します」「頑張ります」と書いたものが多かった。これからピアノを練習して上手になる能力ならば、すでに上手になっているはずであるし、努力して積極的になれるのなら、消極的だと思わないはずである。したがって、こうした回答は、何も対応策がないことを表している。

別の視点から見ると、「努力します」「頑張ります」といえば、何もしなくても、できの悪さの現実をごまかしてもらえた、という習慣が身について、こうした回答になったともいえる。

学校、塾、お稽古ごとなどで、他人に評価されることだけを経験してきたせいも、自分の能力を直視して、自分なりに評価するという力が不足している。これでは、短所や不安に対して、対応策が立たないのも仕方がない。

「それなりにやっていく」に例示した「短所も個性ととらえて、自分らしく生きたい」などのように、総合的に自己評価している回答は、ほんの僅かであった。

(5) 「学ぶ」よりも「指導する」ほうが好き

「本学の教育への感想・要望」「後輩へのアドバイス」を読んでいると、学生の意識は、「学ぶ」学生ではなく、「指導する」保育者のほうに、重点が置かれている。

たとえば、授業に対する要望の大部分は、講義は聴いても役に立たないから、手遊び、ピアノ、制作など、もっと役に立つことを教えて欲しい、というものである。

もはや、講義を受講する学生として大学の教員の前に座っているのは苦痛で、子どもを指導する保育者として立つほうが好きなのだ。だから、大学の教員は、保育者としてうまく立つ方法を手取り足取り教えて欲しい、ということなのだ。

こういう学生は、自分がうまく振る舞うことにしか関心がないから、大学で習った手遊びをそのままやれば勤まる、ぐらいにしか考えていない。

習った手遊びを、子どもの状況に合わせてどのように応用し発展させるかではなく、そのまま使って楽に勤めよう、といった魂胆の学生が、いくら手遊びのレパートリーを増やしたって、役に立たないどころか、子どもを育てることさえできない。

また、後輩に対してのアドバイスの多くは、実習のとき自分たちがいわれてきたことの受け売りである。学生の立場でそれを咀嚼し、自分なりに考えて後輩に伝えるのは少なく、自分でも実行できない立派なことを保育者の立場でいっているにすぎないことが多い。ふだんの学生の様子からみて、よくも後輩に対して偉そうなことをいえるな、と思わざるを得ない。

討 論

(1) 日常性と結びつかない概念

かつて、日本における児童心理学の研究を概観して、多くの研究が、アメリカの研究の文脈だけで行われて、研究者の日常の必然性から出発しておらず、研究者の日常性は、研究の論理とは無関係に営まれていることを指摘した(岩井、1983)。

保育界も、学界と同様、時代によりいろいろな概念や言葉が流行している。その概念や言葉の提唱者は、歴史的状況において、その人なりの日常性からの必然的な過程を経て提唱しているのだが、それが、研修会、研究会、学会等で流行すると、歴史的状況が無視されて、概念や言葉だけが一人歩きする危険性がある。

学生の保育に関する概念や言葉の使い方が、自分の日常性と結びつかず、実際にどんなことなのか分からないけれど、教えられたから使う、という感じであることを指摘したが、それは、学生の問題だけでなく、学生を指導する大学の教員や保育者の問題でもある。

たとえば、「子どもを教えるのではなく、発達を援助する」「子どもから学ぶ」などの言葉が、保育者自身の生き生きとした保育活動から必然的に生まれた言葉ならば、どういうことか学生に伝わり、保育者の仕事は楽しくて面白くてたまらない、と学生が思うはずである。しかし、学生の記述を読むと、「発達の援助」のイメージがないままに、「発達を援助する大変な仕事」と受け取っ

ている学生が多いのだ。

どうも、保育に関する教育、研修、研究という場になると、自分の日常性とは結びつかない、自分の保育や研究の必然性から出発したのではない、借り物の概念や言葉を使う傾向がある。だから、概念や言葉に迫力がない。雑誌「発達」83号(2000年7月)の「保育者の成長と専門性」という特集を読むと、そうした思いが新たになった。

(2) 短大生として学び発達する実感

期末試験の前に、学生の質問を受け付けると、「何書いたらいい」「どう書けばいい」「何覚えたらいい」「要点教えてくれないとテスト勉強できない」といった質問が多く、学習内容についての質問は皆無である。

つまり、内容が分からなくても、事細かに教えられたことを丸暗記すれば、テストを通過できる、ということなのだ。そのため、「成績が上がる」「上手になる」などの評価は気にするが、勉強する内容を分かろうとしない。こうした学習態度では、いくら勉強しても、自分が変わる経験をしないから、学ぶことを面白いと感じない。

子どもの発達が分かるためには、子どもが見えないうちから保育者意識を持つよりも、在学中に何が変わったかに気づき、学生として学ぶことによって自分が発達することを実感することが必要だ。実技技能の習得も、役立つためでなく、自分が成長発達の喜びを味わうものでなければ身につかない。

短大生として自分が成長し発達した喜びや面白さを経験すれば、子どもが発達する姿も見えてくる。柳城で学んでよかった、といった記述をした学生の多くは、柳城で自分が成長発達したことを書いていた。

学生としての現在を十分に生きることのできない学生が、保育者になって十分に生きることが不可能である。

(3) 柔軟に自分を変えられる人間形成

就職先から、即戦力を求められているが、学生の能力から見て、何もかもできるようにしてやることは、不可能だ。「即戦力になる」「できるようになる」ということが、かえって学生の構えを固くして、職場への適応力を弱くしている。

むしろ、未熟で、失敗してもよいから、就職した幼稚園・保育所の子どもや教職員の状況に合わせて、自分を変えることができ、そこに喜びと悲しみを感じることができるよう、柔軟な人間になることが大事だ。そうなれば、いろいろな短所や不安があっても、就職してから学び成長していけば困らない、という見通しを持てるはずである。

ところで、本学のキリスト教教育が、学生の保育者観の形成にどのような影響を与えているのだろうか。今回の調査では直接の回答を得ていないが、学生の自由記述を読みながら想像すると、結果として、「柔軟性」よりも「固さ」に、「学ぶ」よりも「指導する」の方向に、学生を向けているような気がする。

私自身、キリスト教は、本来、「柔軟性」と「学ぶ」方向を支える働きをするものと思っている。このことについては、改めて検討してみたい。

付記：データの入力、分類、解釈などに、専攻科保育専攻の学生佐尾久美子、遠山絢乃の協力を得た。記して感謝したい。

文 献

- 岩井勇児 1969 教職観の形成に関する研究：I
愛知教育大学研究報告(教育科学)18、153-172。
- 岩井勇児 1983 概観「児童心理学の進歩」22、1-24。
- 森上史郎ほか 2000 特集：保育者の成長と専門性、「発達」83号1-74。

保育科学生の保育者観の形成

— 資料 —

調査EVT9912HC

調査年月日 1999年12月6日

この調査では、保育者について、あなたが今考えていることを知りたいのです。思ったとおりのままに教えてください。

(1) 最初に現在の進路状況について、お聞きます。

1. 幼稚園・保育所に就職が内定している。
2. 未定だが幼稚園・保育所に就職の予定。
3. 一般企業に就職が内定、就職の予定。
4. 進学、あるいは進学の予定。
5. その他 ()

3～5の回答者は以下の質問に保育者になると仮定して教えてください。

(2) いつ頃から「保育者になりたい」と思いましたか。

1. 就学前から
2. 小学生の頃から
3. 中学生の頃から
4. 高校入学の頃
5. 受験の頃
6. その他 ()

保育者になりたいと思ったきっかけ、理由など書いて下さい。

(3) 本学に入学した頃に漠然と描いていた保育者のイメージと比べて、卒業、就職が近づいてきた現在の保育者のイメージは変わりましたか。

1. 変わった
2. 変わらない

「変わった」と答えた人は、どんなところが変わりましたか。
「変わらない」と答えた人は、そのイメージを書いて下さい。

(4) 保育者養成という視点から、本学の教育について、感想あるいは要望があれば、書いて下さい。

(5) あなたの保育者としての資質を振り返ってみて、長所あるいは自信のあるところを、どんなことでも良いから書いてください。

(6) あなたの保育者としての資質を振り返ってみて、短所あるいは自信がなくて不安に思うことを、どんなことでも良いから書いて下さい。

(7) 「短所あるいは自信がなくて不安に思うこと」に関して、自分なりに何か対応を考えていますか、あれば書いて下さい。

(7) 保育者になるための学生、という視点から、後輩へのアドバイスがあったら、書いて下さい。

調査へのご協力ありがとうございました。

How the Students Constructed Their View of Kindergarten Teacher

Yuji IWAI*

本学学生に保育者に関する自由記述を求めて分類整理した。子どもが好きで早くから保育者を志望した学生が多いが、授業、実習などを経て、予想していたよりも保育者は大変な仕事であると感じている。しかし、その内容は自分で考えたというよりも教えられたもので、本当のところ、何が大変なのか分かっていないところがある。また、子どもへの関心よりも、自分の評価に関心がある。

したがって、保育者としての短所などに対応策がなく、頑張る、努力するなど肩肘はって固くなる傾向がある。

職場の状況に応じて、自分を変化させ、成長できる保育者を養成するために、在学中は、保育者意識を持たせるよりも、学生として学び自分が発達することの面白さに、もっと目を向けさせる必要がある。

キーワード：保育科学生、保育者、保育者養成、保育者のイメージ